

神のもとに集まり、神に拠って

校長 赤坂 泉

いと高き方の隠れ場に住む者
その人は 全能者の陰に宿る。
私は主に申し上げよう。
「私の避け所 私の砦
私が信頼する私の神」と。

(詩篇91:1,2)

学舎近況

COVID-19のもたらした未曾有の事態に諸教会の皆様も難しい選択や調整や忍耐を重ねてこられたことと思います。学舎も同様で2月中旬から感染予防の注意喚起を重ね、3月になると持ち方を調整したクラスもありました。3月16日の卒業式は、二転三転の末、学内行事として実施しました。神学教育は教会のわざと告白する学舎に教会の皆様をお迎えしないことは苦しい決断でしたが、感染拡大防止を優先することとしました。奉仕教会への出入りも留め始められていましたから。研修生有志によって卒業式の模様をライブ配信する手配が整い、当日は129件の接続がありました。諸教会で、また同窓生諸師が卒業式を覚えてくださり、後日多数のコメントも下さったことにも励まされました。

春期調整期間を5月6日まで延長しましたが、単身寮、家族寮共にこの期間も主に守られ、工夫しながらの自粛期間を過ごしました。新年度の対応については「学舎から」に譲りますが、聖書宣教会通信を一号休止とし、この号外も個人宛ての郵送は失礼することだけここにお伝えし、ご理解をお願い申し上げます。本紙はウェブサイトでもご覧いただくことができます。

「いっしょに」集まること

教会も主日礼拝の整え方から活動の隅々まで多くの判断を迫られました。神の民の優先順位と市民的な責任の両立は？、緊急事態宣言と自粛要請の中でなす教会の主体的な選択は？と、神を愛し隣人を愛する具体的なあり方を祈り求めておられることでしょう。

そのなかでヘブル10:25「ある人々のように、いっしょに集まることをやめたりしないで、かえって励まし合い（新改訳第三版）」という訳文は、教会の議論があるいは助け、あるいは緊迫させたようです。改めて「いっしょに」集まることの意味を考えましょう。新改訳2017は「ある人たちの習慣に倣って自分たちの集まりをやめたりせず、むしろ励まし合ひましょう」と訳しました。細かな議論は措いても、「いっしょに」ではなく「集まり」に注目すべきことは明らかです。また「励まし合い」を見落としてはなりません。

また少し視野を広げて、19節からの段落にある三つの勧告に留意しましょう。1. 信仰をもって神に近づこう、2. 希望を告白しよう、3. 「愛と善行を促すために、互いに注意を払おうではありませんか(24)」です。25節の、集まりを止めないで、励まし合うようにという勧めはこの第三の勧告に従属しています。つまり、いっしょに、どのように集まるかがこの箇所を中心的な関心ではなく、神に近づくこと、希望の告白に生きること、とりわけ愛と善行を促し合うことが関心事で、そのための集まり、そのための励まし合いだということです。しかも、3:13に「日々互いに励まし合って」とあったように、主日の礼拝や特定の集会だけのことではなく、日々のことです。

確かに教会は「一つになって」あるいは「同じ場所に」（使徒1:15, 2:1,44,47...）集まりました。しかし、困難や迫害によって散らされると「みことばの福音を伝えながら巡り歩いた」（cf. 使徒4:29,31, 6:7, 8:4, 12:24...）のでした。パウロの宣教の足跡からも、一つの場所に集まった教会、家々に集まった教会、少人数の集会など多様なあり方が窺われます。

集まりの形態でなく、目的に焦点を合わせましょう。

こんにち多様な手段が備えられていることを神に感謝します。一堂に会することは幸いです。顔と顔を合わせるなかでいただく励ましがあります。同時に、インターネット等を介して「集まる」ことも幸いです。礼拝や祈禱会への「出席」がむしろ増えているという事例も聞きます。未信の家族が礼拝に連なり、多忙を理由に諦めていた教会員が次々に祈禱会に連なる。

このときならではの幸いも数えましょう。集まること自体ではなく、愛と善行を励まし合うこと、神を愛し、隣人を愛する日々の現実を励まし合うことが目的であるなら、それを実現する手段はもっともっとありそうです。そして私たちの社会は、まさに今のとき、真実な愛の実践を必要としています。

さらに「コロナ後の世界」を展望しましょう。あらゆる面に及ぶ激変を見るのかも知れません。直面するのが何であっても、信仰をもって神に近づき、希望を告白し、そして「愛と善行を促すために、互いに注意を払おうではありませんか。」そのために教会の「集まり」がいよいよ用いられますように。

感謝

学舎の財政についても感謝の報告を申し上げます。手続き未了ですが、2019年度の経済的な必要も諸教会の皆様を通して豊かに満たされたことは確実です。定期的な献金の背後に、折々の特別な献金の背後に、主の民の祈りと奉仕を想い、大いに励まされてきました。主のわざに参与してくださる皆様に祝福をお祈りし、この事態にあっても、また「コロナ後」の世界のためにも、主の教会が強められますようにお祈りします。

学舎から

教務主任 伊藤 暢人

聖書神学舎のことを祈りに覚え、お支えくださる皆様、学舎の様子をお伝えするのが遅くなってしまったことをお詫び致します。

中止、変更の数々…

羽村は東京の外れとはいえ、東京都内です。COVID-19に感染した方も市内におられました。教師会は3月終わりから5月初めにかけて定例・臨時の集まりをオンライン会議で何度も繰り返し、新年度をどのように始めるか議論を重ねました。幸か不幸か、最初はごちなかったオンライン会議にも段々と慣れてしまいました。結果、4月初めにオリエンテーションを1度だけ行って年度初めに伝えるべき事柄だけを伝え、入会式は5月7日に遅らせることにしました。

これにより年間計画は大幅な修正を余儀なくされました。研修生行事のピクニックや、予定されていた特別講義は中止して、授業日を確保することにし、かつ、夏期調整期間も短縮することにしました。また、外部とのかかわりも縮小せざるを得ませんでした。前期の聴講生は、研修生夫人など内部の人だけに限らせていただき、外から通われる方はお断りさせていただきました。拡大教育も、声を出して歌う教会合唱講座は中止、四ッ谷の聖書講座はオンラインで行うことにして、これも開始時期を遅らせました。

毎年行ってきた夏期研修講座と教会音楽夏期講習会も、残念ながら中止です。伝道実習（キャラバン伝道）も夏に東京から地方へお伺いすることは難しく、秋以降に延期するか、もしくは違う形で履修することになります。

これらのことは、研修生を送り出してくださる諸教会、またお支えくださっている諸教会・個人とのかかわりの中で歩んでいる学舎にとっては、本当に申し訳ないものばかりですが、どうぞご理解くださいますようお願い致します。

新年度開始

そのような中ではありますが、5月7日に内部関係者と一部オンライン出席で入会式を行い、新年度を始められたことは大きな喜びでした。

その日から早速授業開始です。現在はオンラインで行われている授業も多く、研修生は寮室や教室から参加します。教室で授業を行う場合も、大きめの部屋に人数制限をしながら集まり、社会的距離を保って座り、かつ消毒や換気にも気をつけています。

チャペルも、苦勞しながらも毎日続けられています。授業同様、全員が集まることはできず4年生だけはオンラインで参加したり、教師がオンラインでメッセージをしたりしています。それでも、日々主のことが語られることは大切な霊的整えであり、研修生にとって主の御前に出る厳肅なときになっています。

加えて、聖書学研究所も始動しました。下記の記事にあるとおり、学舎がこの時代にあってなすべき働きに従事していくことのできるようにと願っています。

お祈りください

上記のように諸々の活動を始められたことを感謝します。しかしご賢察のとおり、オンラインでの授業やチャペルには限界があります。また、コロナ禍で奉仕教会に通えない研修生も多くいます。単身寮は臨時に一人部屋にしており、交わりや生活面での訓練も課題です。研修生たちがそれぞれに必要な学びと訓練のすべてを受けられるように、どうぞお祈りくださいますようお願い致します。そして皆様の上にも、主の守りと励ましが豊かにありますように、お祈り申し上げます。感謝。

聖書学研究所がなぜ必要か

聖書学研究所 所長 津村 俊夫

新型コロナウイルスが国境を越えて広がる時代。グローバルな時代はあらゆる所で従来の枠組みが崩壊しています。聖書学の分野でも同様です。

一昔前までは、福音派と自由派の線引きが明確で、「内と外」の論理で真偽の見分けが容易につくように思われました。それは、外に対してはリベラルなものに対する戦いであり、内に対しては外から忍び込む異端との戦いです。しかし「寛容」の時代は線引きが難しい時代です。何が真実であり、信頼に足ることであるかを判断することが困難な時のようにも思われます。

聖書学では、19世紀から20世紀の半ばにかけて一世を風靡したドイツ歴史批評学の覇権の時代は終わりました。その代わりに、学問的アプローチの『小国分割』の時代を迎えています。言い換えれば、学問的

に「なんでもあり」の時代です。国際学会では、かつてリベラルと言われた批評学者を始め、ユダヤ人学者、モルモン教徒、福音派、カリスマ派、無神論者等々、多様な研究者が集っています。自分の立場を放棄しないで、聞く耳を持たなかった学者たちに、いかにして耳を傾けてもらうか、それにはこの上もなくタフな知性と知恵が必要です。

本研究所は、聖書学が「聖書学学」にならないように、どこまでも聖書本文に「聴き続ける」研究をするために始められました。「著者を抹殺してテキストのみ集中する」聖書解釈学が目される中、再び、著者の意図した意味を汲み取る「地道な」聖書研究を行い、この時代の「みことば」の宣教を支えるものとなるように願っています。どうぞお祈りください。